

令和 2 年 6 月 15 日現在

機関番号：32620

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2019

課題番号：15K02533

研究課題名（和文）言語実践としての明治中後期の翻訳と近代イデオロギーの構築

研究課題名（英文）Translation as a language practice in the middle and late Meiji era and the formation of modern ideologies

研究代表者

坪井 睦子 (TSUBOI, Mutsuko)

順天堂大学・国際教養学部・非常勤講師

研究者番号：40640470

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本の明治中後期における翻訳を介した西洋近代イデオロギーの構築過程を明らかにすることを通じ、言語実践としての翻訳の相互行為性を探求するものである。“nation”及びそれに関わる西洋近代の諸概念の翻訳に焦点を当て、翻訳学、及び関連する人文社会諸科学の理論と枠組みを援用し、文献研究と当時の活字メディアのテキストを対象とする談話分析を主たる研究方法として研究を遂行した。その結果、「国民」「民族」を含む日本の近代化の中核を成す概念・イデオロギーが、翻訳と当時の翻訳を取り巻く社会・文化・歴史的コンテクストとの相互作用の中で形成されていく様相の一端が明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

明治期に広範に行われた翻訳と、その結果新たに生まれた多くの翻訳語が日本の近代化に果たした役割については、人文社会諸領域で優れた研究が蓄積されてきた。しかし、これらの研究でほとんど探求されずにきたのが言語実践としての翻訳の相互行為的側面であった。翻訳が社会・文化・歴史的コンテクストの中で展開する言語を介した相互行為であることの一端を明らかにした本研究の成果は、翻訳学のみならず学問領域を越えた関連諸分野の研究の進展に寄与するとともに、近代化の過程を経ることを余儀なくされた他の多くの非西洋諸国と様々な問題を共有する現状を鑑み、言語、民族、国を超えた議論を深める一助となるものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study explores translation as a language practice and social interaction by clarifying the formation process of Western modern ideologies through translation in the middle and late Meiji era in Japan. Focusing on the translation of “nation” and related Western modern concepts, we conducted this study mainly based on literature on the Meiji period. In addition, we conducted discourse analysis using the written texts in print media at that time within the framework of translation studies and related humanities and social sciences. The results of the analysis suggest that the concepts and ideologies constituting the core of Japan’s modernization, including those translated from the word “nation,” were formed through the interaction between translation practices and the socio-cultural and historical contexts surrounding the translation at that time.

研究分野：翻訳学 異文化コミュニケーション学 言語人類学 談話分析

キーワード：翻訳研究 近代イデオロギー 相互行為性 活字メディア テキスト コンテクスト 談話分析 明治期

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

1. 研究開始当初の背景

本研究課題は、明治中後期の活字メディアに現れるテキストを当時の社会・文化・歴史的コンテキストに位置付け、分析することを通し、翻訳と日本における近代イデオロギーの構築過程との関連性を明らかにし、言語実践としての翻訳の相互行為性を探求するものである。本研究を開始した2015年の段階において、明治期に広範に行われた翻訳と、その結果新たに生まれた多くの翻訳語が日本の近代化に果たした役割については、人文社会科学の諸領域で多くの優れた研究が、すでに蓄積されていた。国語学や日本語学、あるいは思想史や哲学の領域では、幕末より明治期にかけ、西洋の思想や文献との邂逅により漢語からの借用や漢字の組み合わせによる造語によって新たな翻訳語が生まれた経緯と翻訳が担った役割が探求されてきた (e.g. 森岡, 1991; 加藤・丸山, 1991)。一方、歴史学、社会学等の学問領域では、日本の近代化と「国家」「国民」「民族」「エスニシティ」との関係を考察する視点から、明治期の翻訳語、特に“nation”あるいは“nation state”をめぐる翻訳語の問題が度々指摘されてきた (e.g. 井上他, 1996; 西川, 2002)。しかし、前者においては翻訳の言語行為的側面、言い換えると、翻訳がそれを取り巻く社会・文化・歴史的コンテキストとの動的、相互行為的な言語実践であることには十分な注意が向けられてはこなかった。他方、後者においては、異なる言語体系間での翻訳の難しさが度々言及されることはあっても、翻訳はある言語体系から別の言語体系への言語の置き換えと捉えられる傾向にあり、翻訳の相互行為的側面への関心は全般的に低い状況が続いてきたと言える。翻訳の相互行為性を探求することなしに、日本の近代化に果たした翻訳の役割を解明することができるのか。こうした問題意識が本研究を構想したひとつの大きな契機となっている。

1970年代に西洋で独立した学問分野として成立した翻訳学は、グローバル化とテクノロジーの進展を背景に急速な発展を遂げ、同時に多様化、広域化が進み、他の人文、社会、自然諸科学との学際化が進んでいる。翻訳学では、学問成立当初から1980年代にかけては、言語学を基盤とし、翻訳を言語間、テキスト間の「等価」という言語的視点から探求する研究が進展を見せた。一方で他の様々な研究領域からの影響の下、1990年代から21世紀にかけて、大きな変革期を迎えた。即ち、翻訳について、翻訳を取り巻く文化、社会との関係から考察する研究、特に翻訳行為のもつ権力性、イデオロギー性、政治性を探求する研究へとその焦点が移行したのである (Tymoczko & Gentzler, 2002; Hermans, 2006)。しかし、西洋で発展してきた翻訳学においては、非西洋圏、とりわけ非英語圏における翻訳の相互行為性についての研究はあまり進展が見られない状況であった。研究代表者・研究分担者は、それぞれの専門とするメディア翻訳、文学翻訳を中心に研究に取り組んできたが、互いの関心事である明治期の翻訳実践の分析を通して翻訳の相互行為性を探求したいという点で一致するとともに、明治期には新聞、雑誌という近代的なメディアを通して、一方で報道テキスト、他方で翻訳文学や近代文学が受容されていった点からも接点をもつことから、互いの強みを生かす共同研究をすることで、翻訳学という視座から学術界に貢献したいと考えたのが本研究の発端である。

2. 研究の目的

本研究は、19世紀後半、日本の近代黎明期における翻訳を介した西洋近代イデオロギーの形成過程を明らかにすることを通し、言語実践としての翻訳の相互行為性について考究するものである。本研究では、研究代表者・研究分担者が共にその研究の基盤を置く翻訳学の知見を活かしつつ、言語使用と社会・文化との関係を探求する人文社会諸領域の理論と手法を援用して、“nation”及びそれに関わる西洋近代の諸概念・イデオロギーが「国民」「民族」など日本語の語彙・概念としていかに生成、普及、受容されていったかについて、テキストとそれをとりまく当時の社会・文化・歴史的コンテキストとの関連から考察することを目指した。2015年度から

2018年度末までの4年間の計画で(研究期間を1年延長したため、実際の終了は2019年度末)、筆者らが当初立てた研究目標は以下の通りである。

- (1) 翻訳と近代、特に近代国民国家というイデオロギーに関し、関連する人文社会諸科学の研究を洗い出し、提起されている問題点と諸問題間の関係を翻訳という視点から整理し直す。
- (2) 明治期における活字メディアとしての新聞(各新聞社によるデータベース)、雑誌(国立国語研究所『太陽』コーパス等)、書籍(国立国会図書館近代デジタルライブラリー等)のデータベースを活用し文献を整理するとともに、テキスト分析を行う対象データを精査し、選別する。
- (3) 明治期の翻訳を取り巻く社会・文化・歴史的コンテキストについて、詳細な文献調査を行う。
- (4) 上記(2)で選別したテキストについて、(3)のコンテキスト分析と絡めながら談話分析を行い、明治期の翻訳の相互行為性について、近代イデオロギーの形成との関係から考察を試みる。
- (5) 研究成果を学会への投稿及び口頭発表、出版という形で発信する。

上記に沿って遂行した研究の成果については、「4. 研究成果」の項に記すものとする。

3. 研究の方法

本研究課題は、上記「2. 研究の目的」に挙げた研究目標の(1)～(3)にあたる文献研究と、その文献研究を基盤としながら行う上記(4)談話分析を主たる研究方法として遂行した。文献研究においては、翻訳学、国語学・日本語学、歴史学、社会学、思想・哲学など、「1. 研究開始当初の背景」にも示した学問分野の先行研究から、考察の対象とした時期である明治中後期を含む明治期の社会・文化・歴史的コンテキストの把握に努めた。即ち、言語実践としての翻訳が行われ、近代イデオロギーが構築されたのはどのような状況下であったのかという明治期の社会・文化・歴史的コンテキストの要因を精査する作業を行いながら、当時の活字メディアにおける翻訳語の使用状況の調査を行った。加えて、明治中後期に発行された一次資料であるテキストの談話分析を実施した。この談話分析においては、テキストを、そのテキストが生み出された社会・文化・歴史的コンテキストに位置づけながら分析するため、文献研究が非常に重要な位置を占める。一方、分析対象としたテキストは、明治中後期に発行されたテキストであり、「国民」「民族」、あるいはこれらに関連する概念を表す語彙が使用されているものである。研究期間の初期には、はじめから日本語で書かれた、ジャーナリストなど当時の知識人による新聞・雑誌記事、論説等の非翻訳テキスト、あるいは翻訳に関するメタ・テキストを中心とした談話分析を行った。その研究成果を生かし、最終年度には、原文テキストと翻訳テキスト両者の揃うテキストとして、陸羯南訳『主権原論』(原著ド・メーストル)の対照分析を行った。

4. 研究成果

本課題研究の成果として、研究代表者単独、研究分担者単独、及び両者の共同による口頭発表を合計8回行った。これらの口頭発表の大部分は、研究論文の形に発展していったことから、ここでは研究期間内に、研究代表者、分担者が単独、また共同で執筆・発表した論文においてどのような成果を残したかを中心に述べるものとする。研究成果は大きく分けて、(1)非翻訳テキストに関するものと、(2)翻訳テキストに関するものの二つである。いずれの場合も「3. 研究の方法」で述べた通り、文献研究と談話分析を基盤として、各テキスト中に用いられた語彙や訳出方法などいくつかの重要項目に焦点を当てながら分析するとともに、そのテキストを当時の社会・文化・歴史的コンテキストに位置づけマイクロ・マクロレベルから分析、考察を行った。

(1)非翻訳テキストを分析対象とした研究は、明治中後期に、政治家、知識人、あるいはジャーナリストらによって発表された、はじめから日本語で書かれたテキストを扱うものであり、それらのテキストにおいて“nation”がいかに解釈され、また同語彙あるいは概念から造られた翻訳語である「国民」「民族」などに意味が与えられ、使用されていたかを探る研究である。具体的には、明治中後期に発行された日本語辞書15冊、読売新聞、雑誌『太陽』をはじめとする刊行物における「国民」「民族」両語の使用状況を調査し、使用された文脈や付与された意味を分析した。また、“nation”概念と関わる近代イデオロギーが観察される、雑誌・新聞に発表された非翻訳テキストも分析した。それらのテキストの主たる執筆者は、「平民主義」（のちに「国家主義」）を謳い、雑誌『国民の友』を発行した徳富蘇峰（1863-1957）、「国粹主義」を提示し、雑誌『日本人』を発行した三宅雪嶺（1860-1945）、同じく「国粹主義」を提唱した志賀重昂（1863-1927）、「国民主義」を掲げ、新聞『日本』を発行した陸羯南（1857-1907）である。上述の人物たちが、雑誌・新聞に発表した論考なども分析対象とし、主に「国民」「民族」を文章中に使っていた事例に注目することにより、当時の論客がどのように“nation”とその関連概念を受容していたのかを、明治中後期のミクロ及びマクロ・コンテキストに位置付けて分析した。分析から明らかになったのは、明治中後期の知識人たちが、“nation”概念をそれぞれに解釈し、「国民」「民族」をはじめとする翻訳語を用いながら、各人が各語に社会・文化・歴史的コンテキストとの関わりから意味を付与していたということである。知識人たちの間で共通する意味をもって使われていたのではなく、そのときどきのコンテキスト的要因と関わりながら、解釈が行われていたことが分析から示唆されたのである。この結果は、“nation”概念が未だ確固としたものではなく、受容される最中であったことを、また「国民」「民族」に固定的な意味が与えられていなかったことを示し、このような受容のプロセスを通じ、近代イデオロギーが構築されていた様子が窺われた。

(2)研究期間初期においても、原テキストと翻訳テキストの対照分析は限定的に行なっていた。それは、1902（明治25）年出版の、高田早苗・吉田巳之助訳『早稲田叢書政治学及比較憲法論上巻』（東京専門学校出版部）と、バルジェス、J. W. (John W. Burgess) による英語原著 *Political science and comparative constitutional law* (1890/1902, Baker and Taylor Company) の対照分析である。これは当該文献の冒頭箇所と比較的小規模な分析であり、その後は非翻訳テキストの分析を進めていたのであるが、研究期間後半において、本研究課題遂行のために適切と思われる分析対象が選定できたことが、以下の原テキストと翻訳テキストの対照分析につながった。取り上げたのは、1885（明治18）年に出版された、陸羯南訳『主権原論』（博聞本社）とジョゼフ・ド・メーストル(Joseph de Maistre) によるフランス語原著 *Étude sur la souveraineté* (1884, Georg Olms Verlag) である。フランス語原テキストの“nation”や関連語彙に着目し、各文脈の中で用いられた各語彙が、日本語翻訳テキストにおいては、どのような翻訳語、あるいはその他の語彙を用いて訳出されているのか検討した。その結果として推察されたのは、明治期の知識人の一人である陸羯南が「国民」概念を「国家」との関連において定義しようと試みていたことである。また、明治政府による欧化政策とは異なり、陸は日本古来から続く（と自身が信じていた）「大和魂」や、日本語と一体となった「国民」形成を目指すべきだと考えていたことも示唆された。

上記の(1)及び(2)を通じ、翻訳が社会・文化・歴史的コンテキストの中で実践される、相互行為であることの一例を示すことができた点は、本研究課題の成果であったと考える。日本におけ

る翻訳学というコンテクストにおいては必ずしも十分な展開を見せてこなかった、翻訳という言葉実践の相互行為性について、明治中後期の近代イデオロギー構築を事例として論じたことにより、その一端を解明することに寄与できたと考える。一般社会においてのみならず、人文社会科学の諸領域においても翻訳は未だ単なる異なる言語体系間における言葉の置き換えと捉えられがちである。異なる文化間での翻訳が難しいことは理解されても、翻訳が社会・文化・歴史的コンテクストにおいて行われる社会的実践であること、したがってその社会・文化のイデオロギーと深く結びついていることには十分な理解が及んでいないのが現状である。この状況下で、本研究課題において筆者らがその一端の解明を試みた明治中後期の翻訳と近代イデオロギーの関係性、そしてそこから導き出される翻訳の相互行為性についての論究は、学問領域を越えた研究成果の共有に寄与するとともに、翻訳学の発展に貢献するものであると考える。翻訳とは、太古より人が出会うところ、異なる言語、異なる文化の接するところで綿々といわれてきた人間の営みであり、人々が違いを認識しつつ、相互に相手を受け入れ、共に生きていくための知恵でもあり実践でもある。だからこそ、翻訳のイデオロギー性、とりわけ現代を生きる私たちにとって避けることのできない近代を象徴するイデオロギーについて理解を深めることは、差異と対立を超えた共存を模索するためにも必要なことと考える。

今後の展望として、まず取り組むべきは、本研究を通してその深みと広がり学ぶ機会を得た各専門領域における研究を整理し、網羅的に、かつ研究領域相互の接点と関係を探った上で、明瞭な形で提示しその成果を学問領域間で共有することである。本研究が扱ったもの以外のテキストを分析対象とした明治中後期あるいは、別の社会・文化・歴史的コンテクストにおける翻訳を対象とした研究を、他の研究者との共同研究も含め実施していくことにより、言語実践としての翻訳の相互行為性がより明瞭に示されるようになることが期待される。加えて、本研究課題が日本に限られた問題ではなく、近代化の過程を経ることを余儀なくされた多くの非西洋諸国とも様々な問題を共有している現状を鑑みると、学問の領域だけでなく、言語、民族、国を超えた、即ち“nation”を超えた議論を深めていくことこそ今求められていると言えるだろう。そのような研究が進められてこそ、今なお近代諸概念を巡って混迷する翻訳実践の場にも新たな知見がもたらされ、理論と実践の架橋にも繋がるものと考えられる。

<引用文献>

- Burgess, J. W. (1890/1902). *Political science and comparative constitutional law, Vol. 1. Sovereignty and liberty*. New York: Baker and Taylor Company. [Online] *Internet Archive*
https://archive.org/stream/politicalscience01burgiala/politicalscience01burgiala_djvu.txt (July 25, 2015)
- バルジエス, J. W. (1902). 『早稲田叢書 政治學及比較憲法論 上巻』(高田早苗・吉田巳之助・訳) 東京専門学校出版部 [Online] 『近代デジタルライブラリー』
<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/789034> (2015年7月25日)
- de Maistre, J. (1884/1984). *Étude sur la souveraineté, Œuvres complètes, Tome 1*. (pp. 311-416). Hildesheim: Georg Olms Verlag.
- ド・メストル, J. (1885). 『主権原論 (博聞社蔵版)』(陸實・訳) 博聞本社.
- Hermans, T. (Ed.). (2006). *Translating others, Vol. 1&2*. Manchester: St. Jerome.
- 井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉 (編) (1996). 『民族・国家・エスニシティ』岩波書店.
- 加藤周一・丸山真男 (1991). 『日本近代思想大系 15 翻訳の思想』岩波書店.
- 森岡健二 (編著) (1991). 『改訂 近代語の成立一語彙編一』明治書院.
- 西川長夫 (2002). 『戦争の世紀を越えてーグローバル化時代の国家・歴史・民族』平凡社.
- Tymoczko, M., & Gentzler, E. (2002). *Translation and power*. Boston: University of Massachusetts Press.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 齊藤美野・坪井睦子	4. 巻 19
2. 論文標題 「陸羯南訳『主権原論』から探る「国民」概念の形成」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『通訳翻訳研究』	6. 最初と最後の頁 45-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 TSUBOI, Mutsuko	4. 巻 5(1)
2. 論文標題 Nationalism and Ethnicity in the Modern Japanese Context: Translation and Ideology in the Late 19th Century	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 CLINA	6. 最初と最後の頁 27-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.14201/clina2019512744	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 TSUBOI, Mutsuko & SAITO, Mino	4. 巻 17(1)
2. 論文標題 Translating 'Nation': Translation practices during the modernization of Japan	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 FORUM	6. 最初と最後の頁 39-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 坪井睦子	4. 巻 15
2. 論文標題 「“nation”の翻訳：明治期における翻訳語の創出と近代イデオロギーの構築」	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 『通訳翻訳研究』	6. 最初と最後の頁 pp. 147-171
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 齊藤美野	4. 巻 15
2. 論文標題 「翻訳語「国民」「民族」の普及の様相：明治期の非翻訳テキスト（辞書・雑誌記事）の分析」	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 『通訳翻訳研究』	6. 最初と最後の頁 pp. 127-145
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 6件）

1. 発表者名 坪井睦子
2. 発表標題 接触・翻訳・変容 "nation" の境界を超えて
3. 学会等名 日本国際文化学第18回全国大会（長崎県長崎市）フォーラム「私の国際文化学」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 齊藤美野・坪井睦子
2. 発表標題 翻訳語について令和のいま考える：「国民」成立事情
3. 学会等名 日本通訳翻訳学会第20回年次大会（東京都豊島区）プレカンファレンス シンポジウム「未来につなぐ柳父翻訳学」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 TSUBOI, Mutsuko
2. 発表標題 Revisiting Nationalism: Translation and Nation
3. 学会等名 IATIS (International Association for Translation and Intercultural Studies) 6th International Conference (Hon Kong, China) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1 . 発表者名 TSUBOI, Mutsuko
2 . 発表標題 Nationalism and Ethnicity in the Modern Japanese Context: Translation and Ideology in the late 19th Century
3 . 学会等名 1st International Conference “ Translation and Cultural Sustainability: Groundwork, Foundations and Applications ” (Salamanca, Spain) (国際学会)
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 SAITO, Mino
2 . 発表標題 Discovering a National Language in Japan With the Help of Translation
3 . 学会等名 IATIS (International Association for Translation and Intercultural Studies) 6th International Conference (Hon Kong, China) (国際学会)
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 TSUBOI, Mutsuko
2 . 発表標題 Translation practice in the age of globalism and nationalism: Representations of "nation" in Japanese
3 . 学会等名 FIT (International Federation of Translation) XXI World Congress (Brisbane, Australia) (国際学会)
4 . 発表年 2017年

1 . 発表者名 TSUBOI, Mutsuko
2 . 発表標題 Inventing the Japanese as a Nation: Role of translation and translators in the modernization of Japan in the late 19th century
3 . 学会等名 8th Annual International Translation Conference (国際学会)
4 . 発表年 2017年

1. 発表者名 TSUBOI, Mutsuko & SAITO, Mino
2. 発表標題 Translating “ Nation ” into Japanese during the Modernization of Japan: Dynamics of Translation as a Social and Interactional Practice
3. 学会等名 Colloquium for the 60th Anniversary of META (国際学会)
4. 発表年 2015年

〔図書〕 計1件

〔産業財産権〕

〔その他〕

報告書冊子 坪井睦子・齊藤美野(2020)『報告書：2015-2019年度文部科学省科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)基盤研究(C)(一般)(課題番号15K02533:言語実践としての明治中後期の翻訳と近代イデオロギーの構築』(発行者:坪井睦子・齊藤美野)
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	齊藤 美野 (SAITO Mino) (90745936)	順天堂大学・国際教養学部・助教 (32620)	